

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 16 日現在

機関番号：22604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720142

研究課題名（和文） トマス・トラハーンと初期近代の手稿文化

研究課題名（英文） Thomas Traherne and Early Modern Manuscript Culture

研究代表者 越 朋彦

(KOSHI TOMOHIKO)

首都大学東京 人文科学研究科 准教授

研究者番号：70453602

研究成果の概要（和文）：

17 世紀のイギリス人作家トマス・トラハーン (Thomas Traherne, 1637-74) の文学を、初期近代手稿文化の歴史的枠組みの中に位置づけて捉え直すことを目的としている。トラハーンの手稿の生成にはしばしば（複数の）他者による「協力的／編集的介入」が認められるという事実に着目することによって、トラハーンの手稿テキストをそれ独自の性質と存在様式を備えた物質的人工物として精査しながら、社会-文学的制度としての「手稿テキスト共同体」(scribal community)における文学テキストの生産・消費過程に関する諸相の分析を行った。

研究成果の概要(英文): The purpose of this research project is to re-examine the literature of Thomas Traherne, the seventeenth-century English devotional writer, within the historical context of early modern manuscript culture. Attending to the fact that acts of “collaborative/editorial intervention” by other people than the author can be recognized in the making of Traherne’s texts, I have analyzed the various aspects relating to the production and consumption of literary texts in the scribal community as a socio-literary institution; and I have suggested that in conducting that sort of analysis, one should look at manuscript texts as material artifacts with their own traits and mode of being.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1300,000	390,000	1690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：17 世紀英文学

トマス・トラハーン

1. 研究開始当初の背景

(1) 初期近代手稿文化研究(Early Modern manuscript studies)という学問領域が英米の研究者たちの間で広く認知され、本格的に取り組みられるようになったのは比較的最近のことで、(Peter Beal がそのパイオニア的業績 (*Index of English Literary Manuscripts*, 1980-93)に着手した 1980 年代を経て後の) 1990 年代以降の事態で

あると言ってよい。この時期を境にして、手稿文化から印刷文化への移行期・過渡期に当たる初期近代（16 世紀～18 世紀初頭）と呼ばれる時代においてマニユスクリプト (manuscript=「手で書かれたもの」) というメディアが果たした機能とその意義を文学史／文化史的枠組みのなかで再構築しようとする試みが一気に活性化してきたのである——具体的には、Harold Love, *Scribal*

Publication in Seventeenth-Century England (1993), Arthur Marotti, *Manuscript, Print, and the English Renaissance Lyric* (1995), Margaret Ezell, *Social Authorship and the Advent of Print* (1999)といった一連の研究書をそうした動向の最良の成果として挙げる事が出来る。こうして近年、初期近代の手稿文化はますます多くの研究者の関心を引きつけるようになってきたとはいえ、手稿テキストが文学的コミュニケーションの(例外的というよりはむしろ)標準的な様態であった世界というものを、400年近くの時を隔てた現代のわれわれが実感的に想像するのは依然として必ずしも容易な仕事ではないであろう。だが、印刷出版によって不特定多数の読者に著作を公開することが不名誉なこと(スティグマ)であるとみなされた時代にあつては、「手で書かれた」テキスト、すなわちマニュスク립トが特権的なオーセンティシティー(真正性)を有していたことをわれわれは忘れてはならない。

(2) トマス・トラハーンは、1896-97年にロンドンの古本屋街で全く偶然にマニュスク립トが発見されたのを契機として、劇的なかたちで英文学史に再浮上することになったイングランド17世紀の作家・詩人である。「再発見」されてから後のかなり長い間、二十世紀前半~中葉を通じて、トラハーンは子ども時代特有の無垢性・純粋性を瞑想的に歌いあげた幻視者の作風のために、ロマン派の先駆的詩人、とりわけ「十七世紀のワーズワス」として語られることが多かった。しかしながら、その後新たな手稿本の発見が続々と行われるにつれ、また、(ほぼ全集に近いかたちの)作品集(*The Works of Thomas Traherne*, ed. Jan Ross, 2005-)が刊行されるに及んで、近年では、宗教や科学をはじめとして驚くほど幅広いテーマについて独創的な思索を行った多面的な作家として再認識されつつある。

(3) (1) で言及した初期近代手稿文化研究の方法論をトラハーンの個人作家研究に応用した例は、日本国内は言うに及ばず英米の学界においてもほとんど見つけることが出来ない。(ただし本研究代表者は早くからこうしたアプローチを実践してきた——Cedric Brown and Tomohiko Koshi, “Editing the Remains of Thomas Traherne”, *Review of English Studies* 57, 2006.) こうした状況を示す例をひとつ挙げれば、最近刊行されたこの作家に関する初の論文集 *Re-reading Thomas Traherne: A Collection of New Critical Essays*, ed. Jacob Blevins (2007)を紐解いてみても、同時代の手稿文化

というコンテキストでトラハーン作品を扱った論考は皆無であった。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、トラハーンを初期近代手稿文化のコンテキストに位置づけて再検討することにある。本研究は、トラハーン研究と初期近代手稿文化研究を有機的にリンクさせることを目指し、もって両研究領域に対して新たな貢献をなすものである。

(2) 手稿本/手書き文字の文化は、15世紀半ばのグーテンベルクによる活版印刷術発明後、少なくとも250年間の長きに渡って、印刷本/活字という新しいテクノロジーと共生・競合しながら、活発な生命力を保ち続けた——本研究はこうした俯瞰的な文化史的枠組みの中でトラハーンの文学全体を捉え直し、さらに、手稿というメディアの諸特性が、文学テキストの生産・受容・伝達・再生産のプロセスとどのように関わるのかという問題に光を投げかけることを目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 初期近代の他の作家たちと比較した場合、手稿文化研究の観点から見てトラハーンのケースが特に注目し得るのは以下の事実による——つまり、現存している手稿本の数が際立って多いということだ。最初の発見から100年以上を経た現在、その総数は十冊にもなる。これらの手稿テキストのうち彼の生前に印刷出版されたものはひとつもない。それら全てはもっぱらマニュスク립トのかたちで読まれていた。トラハーンは初期近代における典型的な「マニュスク립ト・オーサー」の一人であったのである。そしてさらに強調されるべきなのは、これらの手稿テキストのうちほとんどが、マニュスク립ト研究の用語で言うところの「オートグラフ」、すなわち作者の自筆であるという点である。これがいかに異例な事態であるか知るためには、同時代からの比較例をひとつ挙げておけば十分であろう。十七世紀イングランドの手稿文化において最もポピュラーであり、そのテキストが最も広範に流通した詩人と言えば形而上派の筆頭ジョン・ダン(John Donne, 1572-1631)である。彼の詩テキストの場合、延べ数四千にも達するソースのうち、作者のオートグラフが現存しているのはわずかにひとつの書簡詩についてのみであり、残りは全て「コピー」、すなわち作者本人以外の人間による複写なのである。自筆の手稿テキストがかくも数多く現存しているという事実は、トラハーンという作家が、初期近代手稿文化研究のためにまたとない豊かな素材を提供してくれることを意味する。これは逆に言えば、トラハーン研究が、1990

年代以降加速度的に発展を遂げてきた初期近代手稿文化研究という領域から多くの可能性を引き出せるということでもある。

(2) 初期近代手稿文化研究の泰斗 Beal のひそみに倣って本研究の方法論を一言で述べるとするならば、手稿テキストをそれ独自の性質と存在様式を備えた物質的人工物として精査するということに尽きる。また、テキストの具体的分析から理論化へと至るプロセスにおいては、「修正主義的書誌学」を代表する研究者である J. McGann (*A Critique of Modern Textual Criticism* [1983])、D. F. McKenzie (*Bibliography and the Sociology of Texts* [1986]) らの提唱する「文学制作の社会化された概念」を援用していく。

4. 研究成果

(1) 現存している手稿本の数だけで十にも達するという事実からも推量できるように、トラハーンは非常な多作家であった。しかしテキストの伝播は比較的限定された範囲内にとどまっていたようで、主に選別された友人・知人らから構成される「手稿テキスト共同体」(scribal community)内において流通していたと考えられる。本研究が特に着目したのは、これらのマニュスク립ト・テキストの多くにおいて、(しばしば二人以上の)他者による「協力的／編集的介入」、すなわち加筆・修正・注釈等が認められる点である。瞑想録 *Select Meditations* を含むイェール稿本 (Yale, Osborn Collection, Traherne MS.) を検討例として挙げておく。このテキストには、トラハーンとは異なる二人の人物の筆跡を確認することが出来る。そのうちの一人は書記であり、瞑想録の本文の大半を(恐らくトラハーンの指示の下、別の写本から)書き写している。一方、もう一人の人物は、書記の筆写したテキストに部分的な加筆・挿入を行っている他、瞑想録の後に来る二つの散文小品を書いている。そして手稿本の最後の部分には、トラハーン自身の筆跡によって、短い哲学的散文作品二つが書き込まれている。以上の事実からは次のことが言える。つまりこの場合、手稿テキストという物質的人工物を共有する三者の間には、ある密接な協働関係が成立していたものと考えられる。したがってわれわれはこのテキストを、作家個人が産み出した「作品」というよりは、「共同体的構成物」(communal construct)ないし「団体所有物」(group possession)と見なす必要があるだろう。トラハーンに被せられがちな「孤独のうちに書く芸術家」というロマン主義的イデオロギーに反して、彼はしばしば他者との共同作業によってテキストを生産・再生産する作家であったと結論づけることができよう。今後の研究における課題は、別

のテキスト、とりわけ *Church's Year-Book* を収録するボドリアン稿本 (Bodleian MS. Eng. th. e. 51) と、1997年に新たに発見された長編詩 *The Ceremonial Law* を含むフォルジャー稿本 (Folger MS. V. a. 70) についてもこの問題を検討することであり、社会-文学的制度としての「手稿テキスト共同体」においてどのようにテキストが生産・消費されたかについてさらに洞察を深めることが求められる。

(2) 以上の考察を経て本研究が焦点を合わせるのは、手稿テキストが印刷テキストへと変換される過程の分析である。そのため、読者が受容者＝編集者としてトラハーン作品の再-成型 (re-fashioning) ないし再-提示 (re-presentation) に何らかのかたちで関与していることが認められるテキストが検討の対象として選ばれることになった。(1) で詳述したトラハーンのテキストにおける「介入」の一部は、手稿本が後に印刷本として流通することを想定したうえでテキストを再編成することを意図したものと考えることが出来る。構成員同士の緊密な連帯によって特徴付けられた「手稿テキスト共同体」において制作されたテキストが、一般読者を対象とした印刷テキストへと変換される際のプロセスをここに読み取ることが出来るだろう。同様のことが、トラハーンの死後に友人・知人らの手によって出版されたテキストについても言える。例えば、1699年に出版された *A Serious and Pathetical Contemplation of the Mercies of God, in several most Devout and Sublime Thanksgivings for the same* は、作者の死後にテキストが他者によって「領有」ないし再-生産されたものであり、トラハーンのテキストの後世における受容の問題を考察するためのケース・スタディとしても有益な例であることが分かった。

(3) 多くの研究者によってトラハーンがその一員であったとされる、スザンナ・ホプトン (Susanna Hopton, 1627-1709) をめぐる友愛団体(いわゆる「ホプトン・サークル」)を、「手稿テキスト共同体」として再検証した。この共同体内で流通していた複数の作品が、トラハーンの死後、ホプトン夫人の友人達の肝煎りで *A Collection of Meditations and Devotions in Three Parts* (1717) として出版されるに至った複雑な経緯を分析することによって、手稿テキストが他者の「編集的介入」によって印刷テキストへ再編成されるプロセスを考察した。手稿から印刷メディアへというこの変換プロセスをさらに詳細に追うために続いて検討の対象としたのは、比較的最近 (1997年) の「発見」であることもあ

ってトラハーン研究者の間でもまだあまり論じられていない“Lambeth Manuscript” (Lambeth MS. 1360)である。この手稿本は、トラハーンの協力者と思われる同時代の人間が欄外に夥しい注釈とコメントを書き込んでいる点がとりわけ興味深い。D. Inge (“‘Seeds of Eternity’: A New Traherne Manuscript” [2000])が「トラハーンの批評的読者」と命名したこの人物によるマージナリアは、手稿テキストが後に出版されることを想定して、内容・文体の両面において一般の読者により効果的にアピールするものとなるようテキストを「再-成型」する目的を持つのではないかという結論に達した。

(4) 次に、トラハーンの実弟フィリップが兄の遺した詩テキストを独自に編纂し、18世紀初頭に出版することを意図していた*Poems of Felicity* (British Library, Burney MS 392)を分析した。フィリップは、トラハーンの「原テキスト」に大幅な変更を施したが、先行研究はおしなべて彼の「編集的介入」を無残な「改悪」であると解釈してきた。しかし、そのような過度に「原作者中心的」な観点——つまり、文学テキストを個／孤として書く芸術家によって生み出される自律的なものと見なし、作者以外のテキスト決定因を可能な限り排除しようとする考え方——から脱却し、フィリップが書き変えたヴァージョンを「編集者／検閲者のテキスト」として再解釈するならば、彼のプロジェクトが印刷本読者に向けてテキストを「再-提示」することを目指したものであったと結論付けることが出来る。

(5) こうした分析と考察を通過点として、トラハーンの世界を初期近代における手稿文化と印刷文化の相関的力学というより大きな概念的枠組みの中で解釈し直すことこそが、本研究代表者に課せられた最終的課題であると言える。Marotti や Love の先駆的業績が典型的に示している通り、初期近代手稿文化研究は究極的には、manuscript と print の複雑な相互関連という問題に収斂せざるを得ない。初期近代とは、これらふたつのメディアが共生的に競合していた時代に他ならないからである。最後に、今後のさらなる展開の可能性として、ここ二十年ほどの間に急速に発展してきた「読書の歴史」研究との関連についてひとこと付言しておきたい。この新しい研究分野においては、「読書のテクノロジー」(テキストを読む技術(テクネー)の総体を意味し、抜粋やコメントから成る読書ノートや、テキストの行間や欄外に付される注釈なども含まれる)を詳細に検討することによって、過去の読者がいかにし

てテキストと向き合い、そこから情報を抽出し、そして自らの知的アウトプットにおいてその情報を再-流通させていたかを明らかにすることが目指されている。本研究の焦点のひとつでもあるトラハーンの手稿本に残された「読みの痕跡」を精査するにあたって、こうした「読書の歴史」研究の方法論から学ぶべきことは少なくないはずである。(とりわけ次の二著が今後の研究のために有益であると思われる——Sharon Achinstein, *Milton and the Revolutionary Reader* (1994); Kevin Sharpe, *Reading Revolutions: The Politics of Reading in Early Modern England* (2000).)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)
越 朋彦「トマス・トラハーンの世界における幼年期の観念(1)——ドーベル詩篇を中心に」『人文学報』479号、pp.11-30、2013年。(査読無)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
○出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者 越 朋彦 (KOSHI TOMOHIKO)
首都大学東京 人文科学研究科 准教授
研究者番号：70453602

- (2) 研究分担者 該当なし
 - (3) 連携研究者 該当なし
-